

月刊

AMDA

國際協力

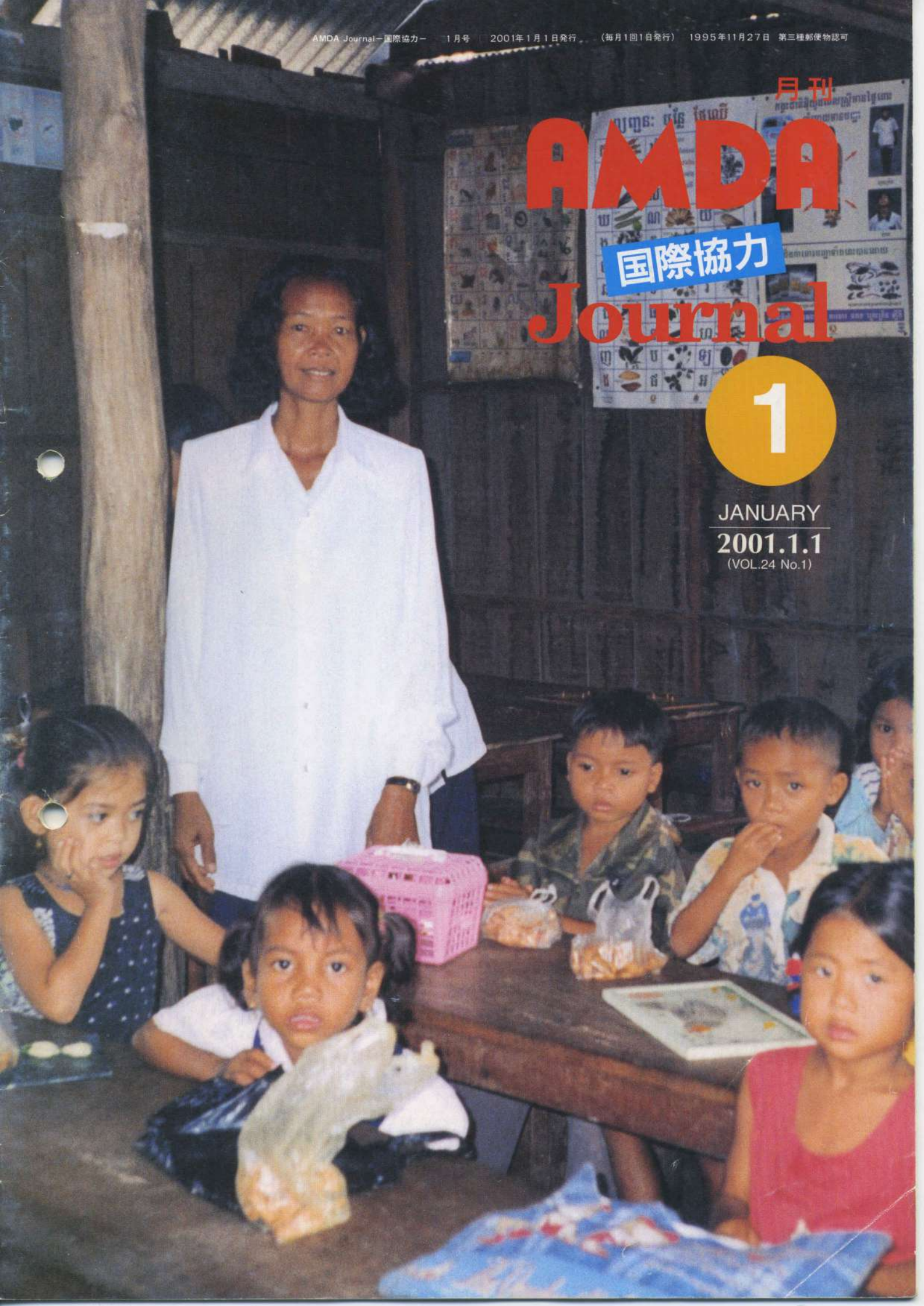
Journal

1

JANUARY

2001.1.1

(VOL.24 No.1)





ソマリア難民キャンプ

AMDAは21世紀に生きる子どもたちの未来が
平和であることを願って活動しています

AMDA 国際協力 Journal

2001
1月号

CONTENTS

謹賀新年



ホンジュラス：
スラム（ラモン・アマヤ・
アマドール）の子ども達



新年の挨拶	2
カンボジア報告	4
ホンジュラス報告	6
アンゴラ報告	8
ミャンマー報告	11
人	15
国際協力ひろば	16
AMDA 支部だより	18
寄付者一覧	19
事務局便り	20



表紙の写真

カンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクト (デイケアセンターの子ども達)

AMDA カンボジアでは1993年4月よりコンポンスプー州において、国内避難民や貧困層の3歳から6歳の子ども達約50名を対象に保育園（デイケアセンター）を運営しています。センターでは主に識字教育、基本的な保健衛生教育そして栄養給食を実施しています。

このデイケアセンターに通う子ども達が入学するのが、今回着工の運びとなりましたチャンバック小学校です（関連記事P4）。子ども達は小学校の校舎が新しく建て変わるのを今か今かと楽しみに待っているそうです。

AMDA 会員ネットワーク 参加者募集

AMDA では目下ネットワークシステムの再構築を進めています。この一環としてアドレスをお持ちの会員の皆様には下記ネットに是非ご参加下さるようご案内します。

●<amda-jnet@amda.or.jp>

AMDA 会員とのインターフェイス機能を目的とし、AMDAの動きをリアルタイムでお知らせできます。

(AMDA 速報・イベント案内・人材募集)

ご希望の方は<member@amda.or.jp>

まで、住所、氏名、電話、FAX に併せお申込み下さい。 AMDA 会員情報局

*書き損じのハガキ、未使用の切手・ハガキ、各種プリペイドカード等がありましたら AMDA にお送り下さい。

*使用済テレホンカードは収集しておりません。
【送り先】岡山市櫛津310-1 AMDA 事務局
お問い合わせは、TEL 086-284-7730 FAX 086-284-8959

* ————— アムダイナターナショナル理事長 菅波 茂

新春のお喜びを申し上げます。

「A Global Network of Partnership for Peace through Projects with Sogo-fujo Spirit under Local Initiative」

この15文字はAMDAのコンセプトをあますところなく表現しています。このコンセプトにもとづいてAMDAの活動は今後も展開されていきます。なお、Partnership（パートナーシップ）とは困難を共にする人間関係です。Peace（平和）とは「家族の今日の生活、明日の希望」が実現できる状態のことです。ProjectsはPeaceを妨げる戦争、災害そして貧困に対して実施されます。

2001年を迎えましてAMDAインターナショナルは支援を必要とする人達と支援をしたい人達とのマッチングを最大限に生かす団体としての機能を拡充していきたく思っています。即ち、支援を必要としている人達のLocal Initiative（現地優先主義）そして支援をしたい人達（ドナー）への責任を果たすためのCentralization（組織の中央集権化）を両輪として、AMDAの目的である「Co-Existence of Diversity（多様性の共存）」を具体化した執行部の多国籍化のもとに、下記の目標を2001年からの5ヶ年間で実現していきたく考えています。

- | | |
|--------------|--------|
| 1) 支部数 : | 50 |
| 2) 姉妹団体数 : | 200 |
| 3) プロジェクト数 : | 200 |
| 4) 予算（年間） | 100 億円 |

関係者の方々の温かいご指導とご支援に厚く感謝申し上げますと共に、本年が皆様方にとりまして最良の年になりますよう心からお祈り申し上げます。



* ————— アムダイナターナショナル事務局長 カーン マハムド ザマン

謹んで新春をお祝い申し上げます。

いよいよ21世紀が明け、NGOにとっても新しい時代が来ようとしています。NGOは開発途上国のコミュニティー開発において重要な役割を果たしています。NGOやNPOが社会をより良くするためのパートナーとして世界で認められてきています。しかし、NGOがもっと運営の専門性と透明性を高め、財政資源の利用において責任を持つことも求められています。医療、技術、そして財政といったリソースを十分に活用して活動を維持し、首尾一貫した国際協力を行わないかぎり、保健デリバリーシステムを強化し伝統的アプローチを越えて、疾病と貧困の悪循環を断ち切ることはできません。

途上国では保健、教育、経済や環境等の問題によって多くの人々が貧困から抜け出すことができません。途上国の貧しいコミュニティーの住民は、生活を変える可能性を秘めていても、リーダーシップや方向性を欠いているのです。NGOが意義あるサポートを提供し、開発途上国でダイナミックで革新的な変化を起こす手助けができるのはそこなのです。

今年もAMDAは人道活動のネットワークを通じて世界の国々を繋げていきたいと考えています。そして、新しい支部を増やし、国内外の組織と関係を築けるよう努力しています。AMDAの目標は、平和、繁栄、そしてパートナーシップの構築、疾病の除去、世界の恵まれない人々の生活が向上する手助けをすることです。

NGOが重要な役割を担うようになるにつれて課せられた課題は多々あります。AMDAはそういった課題に取り組みつつ、人道活動に一層力を注いで行く所存です。最後になりましたが、皆様のご支援に厚く感謝申し上げますとともに、本年もAMDAの活動を温かく見守ってくださいますようお願い申し上げます。

AMDA 国際医療情報センター 所長

小林 米幸

新年あけましておめでとうございます。

我が国にとっての20世紀の最後の10年はバブル経済からの急降すなわち経済不況の混乱の中で終わりました。日本社会の内なる混乱に拍車をかけたのはこの景気の波に翻弄された在日外国人という巨大な集団の存在だろう。彼らを内包することにより、我が国の国内社会はいやおうなしに国際化への転換を迫られた。このような状況下、社会のニーズに支えられて平成3年4月にAMDA国際医療情報センターは生まれました。

センターのめざす社会は外国人が国籍や肌の色によって差別を受けない社会であり、このような社会が構築されたとき、センターの役割も終わるはずです。しかしながらセンターへの外国人医療・医事電話相談は年間4千件にもの

ほり、相談者は外国人はもとより医療機関、区役所、市役所、保健所など行政の末端組織、ホテルなどの民間企業、そしてNGOと広がっており、センターに対する社会のニーズは一段と強まっているというのが実感です。ゆえに今後のさらなる有効な活動をめざして本年4月設立をめぐりにセンターのNPO法人化を進めているところです。

センターの主な仕事である外国人に関する医療・医事電話相談はともすれば政治や思想の世界に密接な関係を持つだけにその舵取りは難しい。海外での医療貢献にだけ目を奪われず、国内の「国際」医療問題にいち早く気づいてセンターを設立したAMDAの先見の明を誇りに思うとともに、この難しい舵取りと運営をやりとげてきた事務局スタッフ、通訳スタッフに敬意と感謝の意を表したい。そしてこの21世紀、センターを含むAMDAグループが私達の幸せと良心を代弁して国内国際社会のニーズによく応え、結果としてグループの飛躍の世紀となることを祈ってやみません。

アムダ国内防災機構（仮称）理事長

岡田 真人

21世紀になりました。

これからもAMDAが社会のニーズに応えられるように、努力していきましょう。

国内防災担当の岡田真人です。昨年は石原知事が主催した東京都の防災訓練や毎年参加している静岡県での防災訓練等に参加いたしました。AMDAの名前は各県の防災関係者にもかなり認知されてきたことと思われまます。

さて阪神・淡路大震災以後、厚生省は災害拠点病院の整備や災害時情報システムの充実を積極的に行ってきました。初期は血の通っていない制度でしたが、担当者の努力でかなり充実したシステムになりました。最近の有珠山噴火や三宅島噴火、鳥取西部地震などでは迅速な情報交換と、医療チームの派遣が実施されました。

このような状況下でNGOはどう活動すべきか、再度検

討する時期にきているのではないかと思います。NGOが活動するためには、1)情報の入手、2)県との連絡、3)派遣人材の確保、4)派遣手段の確保、5)医療器材等の確保、などを迅速に行わなくてはなりません。特に東京都や静岡県との間で培ってきたような、県の医療防災担当者とのパイプがなければ迅速な派遣は不可能と思われる。今年度はそのようなパイプ作りに努力することも必要と思われる。

また厚生省が整備してきた救急医療関係者の派遣システムは、緊急の早期派遣と救急医療には効果を発揮しますが、少し落ち着いてきた状況での医療需要には十分対応できない可能性もあります。したがって発災72時間を過ぎてからもNGO活動の必要性は存在します。これをAMDAとしてどう捉えるか。みんなで考えていくことも必要だと思います。昨年のように新たな災害が各地で起こると思われまます。医療NGOのAMDAがそれにどのような対応をしていくのか、問われる年だと思われまます。

アムダ国際福祉事業団理事長

(AMDA-OGAR) 的野 秀利

21世紀の紀始年頭にあたり、初春のお慶びを申し上げるとともに、AMDAグループの皆様の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

AMDAの国際公益事業の中で国際・環境・福祉ボランティア体験学習、国際理解教育、平和学習等の社会教育事業、障害者福祉事業、地球環境保全事業を担当して参りましたアムダ社会教育福祉事業団は昨秋、アムダ国際福祉事業団へと改称し、事業団本部を岡山県哲多町に移転致しま

した。今後も、学校の総合学習や地域、職域における生涯学習の場に国際協力の現場の声をお届けして、当該分野の発展並びに啓発に寄与する所存でございます。

当事業団では、従前のAMDA国際大学構想をベースに更に検討を加え、その結論として公設民営の研修機関(大学校)の創設を目標とする国際貢献大学校開設計画を'97年末に打ち出しました。以来、関係機関や自治体との度重なる協議を経て、哲多町における公設国際貢献大学校の設置を以てその具現化に漕ぎ着けることができました。

今後とも、当事業団の公益事業に対し御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

カンボジア・チャンバック小学校再建プロジェクト中間報告

◇
コミュニティサービス局

伴場 賢一

AMDA 高校生会と共に推進してまいりました、チャンバック小学校再建プロジェクトは、本年2月末完成を目標に昨年12月1日に着工の運びとなりました。

建設費用につきましては、2年間AMDA 高校生会のメンバーが地道に募金活動を続け、また広島市に本社を置きます(株)ウエスト様のご協力をいただきましたおかげで、建設に踏み切る事が出来ました。

当初の計画では教室2部屋のみのも予定でしたが、皆様のご協力のおかげで教室4部屋・職員室・多目的ルーム(図書館を含む)・お手洗いなどの再建が可能となりました。

この誌面をお借りしまして、ご浄財いただきました全ての方々にお礼申し上げます。

去る10月にはご協力いただきました(株)ウエストご一行と共に現地の視察を行いました。雨季の真っ最中であった為、教室内は雨漏りがひどく、壁も朽ちかけた木材が際立って目につくような状況でした。再建が始まった現在、旧校舎は取り壊され児童達は隣

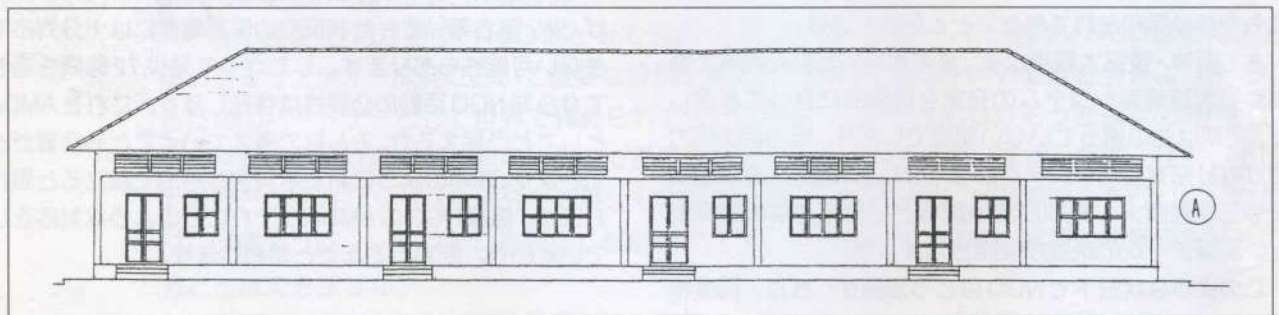
接するお寺や青空のもと授業を受けています。

今回の私どもの小学校再建プロジェクトは、校舎の再建だけでは終わりをみません。現地に密着したプロジェクト、すなわちカンボジア国では長きに渡る内戦によってまた政治的な弾圧などの原因で、将来を担う人材不足が問題となっています。

現在でも、家計の事情から小学校に通う事の出来ない児童達、十分な教育を受けないまま教壇に立っている教師達、またこの地区の住民は内戦時難民化していた人々が多い為大人達も十分に教育を受ける事が出来なかった内戦の被害者でもあります。

これらの観点のもとに、校舎を利用し、児童に安定した教育を受けさせるべく教員へのトレーニング・地元住民への識字教育・保健衛生教育など今後様々なプログラムの実施を通して、継続的に支援してまいりたいと思います。

今後ともご支援賜りますよう、よろしく願いいたします。



カンボジア視察に寄せて

◇

(株) ウエスト

佐々部 宏

チャンバック小学校再建プロジェクトがスタートし、念願の校舎再建が12月1日に着工し、あとは今年春の完成を待つばかりとなりました。

当社は新築住宅「骨太住宅」やリフォームを手掛け、全国展開しているハウスメーカーです。今までは毎週、近隣の公園を社員全員で掃除をしたりといった、ささやかな地域貢献をしておりました。AMDAさんを知ったのは「AMDA自販機」でご活躍のヒカリエンタープライズさんでした。長田社長さんが当社の社長と竹馬の友の関係で、ある時一本のビデオを頂きました。女優の吉永小百合さんがナレーションをし、神田うのさんがレポーターとしてネパールを訪ねたテレビ番組が録画されたビデオです。何気なく社員達と見ていて、熱く涙が出てきた。「我々も何かしたい！役に立ちたい！」そんな思いの中、AMDA事務局を訪ね、我々ができるボランティアを考えました。AMDA事務局の成澤さんや岡安さんから、今回の学校再建のプロジェクトの説明を受け、AMDA高校生会のメンバーが頑張っているこのプロジェクトに参加することになったのです。

昨年10月、AMDAカンボジアに於けるチャンバック小学校の再建の視察の為、カンボジアを訪問しました。日本から約5時間、タイの首都バンコクに到着、乗り換え便で約3時間の待ち合わせ、やっと一日をかけてカンボジアの首都プノンペンに到着しました。

翌朝コンボンスプー州の知事や教育関係者と打ち合わせの為に出発、コンボンスプー州の学校に併設された教育長の事務所でのミーティング、州知事やPTA代表、地区代表、教育長等が出迎えてくださった。今回のプロジェクトはこの地域から更に奥地にある学校で難民や戦争で親を無くした子供が多く、人口が増加している地域であり、様々な援助が行き



届かない地域との事。そんな僻地のチャンバック小学校は雨が降ると勉強する場所が限られ、僅か一棟の校舎もぼろぼろ、今や380名の生徒数に増加し大変不自由しておりコンボンスプー州あげて今回のプロジェクトに対し感謝するとの事でありました。

在カンボジア日本大使館では外務省を通じ、山本参事官(臨時大使)が出迎えて下さり、今回のプロジェクトに対し日本国とし感謝すると共に大使館として「カンボジアは数年前に内戦が終了したばかりで、インフラや社会基盤の復興に向け努力している」との事、是非成功していただきたいとの熱い要請が有りました。

翌朝、チャンバック小学校に向け出発、民家が藁葺き屋根に変わるころやっと到着、道は粘土質の為水は

けが悪く泥だらけで、道無きぬかるみの寺院の境内を進んで行くと、トイレも給水施設も無く、今にも崩れそうな校舎が見えてきました。老朽化した校舎は床も無く、「こんな校舎に約400名近くの生徒が学んでいるとは思えない」と思いながら校舎に入ると、100名以上の生徒や先生が我々を温かく迎えてくれました。感激と驚きの中、「我々はこの学校建設に協力する為日本からやって来ました」と言う挨拶をしました。その時の子供たちの喜びと期待を肌で感じれば感じるほど涙が出る思いがし、完成を待ちわびる子供達の姿がいつまでも目に浮かんできます。

更にこの着工の寄稿に寄せ、関係者の皆様にあらためて感謝と御礼を申し上げます。

ホンジュラス便り

◇
前田あゆみ

朝晩肌寒くなってきました。急激な気候の変化に、私も含め、風邪をひいている人が増えています。年を締めくくる一大イベント、クリスマスを一ヶ月後にひかえ、町のあちこちで飾りがつけられ、クリスマスソングが流れ始めました。

今ホンジュラスのメディアをにぎわしているのは大統領予備選です。2大政党（Partido LiberalとPartido Nacional）が来年の大統領選挙に向けて候補者選びをする選挙が12月の中旬に実施されます。公共事業が利用されたりと様々な形で票集めが繰り返されており、政治家達の醜い争いが続いています。ある国民党の有力候補者は、予備選直前に突然出生が問題になり、ホンジュラス国籍が認められなくなり立候補断念を余儀なくされるような状況です。別の自由党の有力候補者は、ラモン・アマヤ・アマドール（AMDAの活動するスラム、以下RAA）の土地所有問題の解決を促したことにより、RAA内のかんりの票を集めることになりそうです。ローカルスタッフ曰く、金を持っている候補者が勝つ。さて最近（主に11月）の活動報告です。

＜排水溝建設＞

AMDA 鎌倉クラブなど、みなさんからのご寄付により、ラモン・アマヤ・アマドール42ブロックの排水溝がほぼ完成しました。住民の方に非常に感謝されています。排水溝建設により衛生状況が改善され、また道路の状態も保持されることとなります。読売新聞社の記事を読んだ方や青年海外協力隊ホンジュラスOB会からも寄付金が寄せられたので、今後はスラム内でもプライオリティの高い区域で排水溝の建設を継続していく予定です。

＜保健ボランティア育成＞

RAAにて保健ボランティア育成の第2モジュールの第1週目（第2週目は12月第1週を予定）を実施しました。テーマは主に自尊心とリプロダク

ティブヘルス。保健ボランティアとして無償でコミュニティに貢献するためには熱意を持つことが不可欠です。そのために第1週目初日は自己啓発から始めました。その後対人コミュニケーション、ジェンダー、妊娠・出産等について学びました。第1モジュールより参加者数は多少減少しましたが、うれしいことにボランティアの意識は高まっています。今後もボランティアが最初を持った熱意を維持して活動を行っていくために家庭訪問、救急箱供与などの側面支援をしていき、ゆくゆくは地域の保健衛生向上のリーダーとなるように協力していきたいと思っています。

＜エイズ教育＞

ホンジュラスは中米の17%の人口を擁する一方、HIV感染者数は中米内の60%をしめています。現在報告されている感染者数は約15,000名ですが、実際には検査を受けない人が多い、検査結果が集計機関に集まらないなどの要因で、少なくともこの倍は存在するといわれています。男女とも20代に最も感染者が多く見られ、最近の傾向としては、女性、胎児への感染が増加してきています。エイズはまだ社会的にマイナスに見られており、例えば家族内に感染者がいても内緒にしておく、もしくは感染が分かると差別する、家を追い出すといった行動パターンが一般的にみられ、感染者に精神的苦痛を与える結果となります。また月に最低でも5,000レンピーラ（約330ドル）かかる治療薬は一般の人にはアクセスできないといった状況も存在します。こういったケア体制（心理的ケアも含め）の不整備に加え、今後明らかに増加していくエイズ孤児の養育といったことも問題となっています。AMDAでは、性について語るには欠かせないジェンダーや自尊心といったテーマも含め、STD・エイズ予防教育、広報活動に取り組んでいます。

11月27日28日の二日間にわたっ

て、ホンジュラスにおけるエイズ関連団体のアンブレラ組織、Fundacion Fomento en Salud (Health Promotion Foundation) スタッフの協力を得て、HIV・エイズについての“Training of Trainers”を開催しました。RAAの保健ボランティア7名、Carrizal（カリサル〜テグシガルパ市内の低所得者居住地域、人口約4万人）の保健ボランティア4名、Carrizalヘルスセンター所属のソーシャルワーカー2名とAMDAスタッフ（私も含め）4名が参加しました。

ワークショップでは世界におけるエイズ現況、ホンジュラスの状況、感染経路、予防法、コミュニティにおけるエイズ教育、STD（Sexually Transmitted Disease：性感染症）*、またボランティアとして働いていくには欠かせない熱意、自尊心についても取り上げました。残念ながら時間上の制約から、当初はプログラムに含まれていた家庭内暴力、エイズ基本法については削除しなければなりません。これらのテーマは全て関連しており、ボランティアと一緒に学び考えていくために、別の機会を設けたいと思っています。

2日間の密度の濃いワークショップでした。ヘルスセンターレベルでの講習会よりも専門性が高かったので、参加者の満足度も倍増、やる気もさらに昂揚したようです。終了後、自分のパートナーや、近所の人と学んだことをシェアしていきたいという感想が多くありました。今後はワークショップに参加した保健ボランティアを中心に、各自の住むコミュニティでのエイズ予防教育を徹底していく予定です。

* 感染している女性からしていない男性よりも、感染している男性からしていない女性に対しての方が感染の可能性が高くなります。また胎児感染率は約30%。

* 他のSTDにかかっているとそれだけHIV感染の確率が高くなります。

(2000年11月30日)

ホンジュラス排水溝建設プロジェクト中間報告

AMDAでは、みなさんのご協力をいただき、ホンジュラスの首都テグシガルパのスラムで排水溝の建設を行っています。(詳しくはAMDAジャーナル4月号と11月号をご覧ください) これまでに、セメント代の募金という形でご協力いただいた額は、

588,850円 56件 (11月30日現在)

に達しています。お陰様を持ちまして、第1期工事のラモン・アマヤ・アマドール地区の42ブロック(24世帯)でほぼ完成するにいたりました。

ホンジュラスでは現在隣国のニカラグアとともにデング熱の流行が見られ、その拡大が懸念されています。デング熱は蚊が媒介する感染症で、治療としては対症療法しかなく、重症化すれば死にいたることもある病気です。これに対する有効な予防としては蚊の退治をすることしかありません。既に完成した42ブロックではマラリアや下痢とともにこのデング熱の脅威が大きく減ったと言えるでしょう。

42ブロックでかかった費用は見積りよりやや多くなっていますが、これは、砂と石も購入する必要が出たことと、セメントも1軒当たり5袋から7袋が必要になったためです。住民は労働力を提供する他に、測量士への支払いとして300レンピーラ(約2,200円)とセメント1袋分を負担しており、これは平均月収が75ドル(約8,250円)程度の住民にとって決して軽い負担とは言えません。

今後AMDAでは第1期工事の残高で順次ブロックを定めて建設作業に取りかかることにしています。総額が当初の目標である160万円に達すれば、ラモン・アマヤ・アマドール地区の中でも状態の悪いところを重点的に改善することができます。そのためにはみなさんのご協力が必要です。引き続きご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

収入合計	588,850円
支出合計	178,200円
残高	410,650円

(2000年11月30日現在)

1m当たり 約1,060円
1軒当たり=約7,420円



AMDA 鎌倉クラブ ホンジュラス支援コンサート



12月10日鎌倉芸術館でAMDA鎌倉クラブ主催のチャリティコンサートが行なわれました。当日、入り口には時間前から列ができ、予定より早めの開場となりました。

コンサートは合唱あり、踊りあり、器楽の演奏ありの楽しいものでした。特に、普段あまり生で聴く機会のない二胡と中国琵琶の演奏では、姜さんと楊さんのご夫婦の素晴らしい演奏に会場からは大きな拍手と掛け声がかかっていました。

大変多くの方々がこのコンサートに準備から携わって下さいました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。(文責:中南米担当 富岡 洋子)

アンゴラ国内避難民救援プロジェクト

アンゴラ事務所 プロジェクトコーディネーター

谷合 正明

(2000年12月)

皆さんアンゴラようこそ!

AMDAは本年9月より南部アフリカのアンゴラ共和国にて国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) アンゴラオフィスの協力のもと、難民支援プロジェクトを開始することになりました。今回、日本政府もアンゴラに対しては国際機関を通して、資金的なサポートをしております。こうした中、わたしは、アンゴラで活動する唯一の日本のNGOとして、AMDAに対する期待の高さ、また役割の大きさを日々感じております。

このプロジェクトは、具体的には、北部ザイーレ州のムバンザ・コンゴという町にある州立病院において、AMDAの医師による診療、現地病院スタッフのトレーニング、栄養プログラム、予防接種プログラム等を中心に実施するものです。今回がアンゴラからはじめてのレポートとなります。今回はあっという間に過ぎ去ったこの2ヶ月の足跡を辿ってみたいと思います。

1. アンゴラプロジェクトについて

8月21日、岡山本部より2名のスタッフがアンゴラ駐在の辞令を受け、関西空港を飛び立ち、一路南アフリカ経由でアンゴラに向かった。その3日後には、アフリカのジブチ共和国から2名の応援部隊が、パリ経由でアンゴラに向かった。日本からの2名はわたし谷合(プロジェクト・コーディネーター)と田中一弘(ファイナンス・オフィサー)、ジブチからの2名は、AMDAジブチオフィス駐在代表のハサン氏と同じくAMDAのプロジェクトに従事する伊藤まり子医師である。

UNHCRは難民支援を一手に引き

受ける国連機関である。アンゴラでのUNHCRのプロジェクトは、98年にみたび再開された内戦の影響を受けて大幅縮小して以来、2年ぶりに本格的に始まるものであった。AMDAも95年から98年まで、UNHCRの実施パートナーNGOとして、サンザ・ボンボという小さな町で、病院支援のプロジェクトを行っていた。

今回は帰還難民支援が中心のプロジェクトであったが、今回は100万とも200万人とも言われている国内避難民の生活支援が目的である。

1975年にポルトガルから独立して以来、この国の人々は、25年にもわたる内戦に苦しんできた。この内戦は世界の冷戦の縮図と言われた。現在も、内戦に終止符が打たれたわけではない。反政府軍組織であるUNITAは、11月11日の独立記念日を前にして、まだ戦争は続いているとの声明文を発表したばかりだ。

アンゴラは本来豊かな国であった。石油もダイヤモンドも採れる。広大な国土は、農業にも適した土地を持つ。ある国連関係者は「資源で言えば、世界で一番豊かな国かもしれない。だが最もまちがった歴史を繰り返してきた国だ」と言っている。

結果、首都ルアンダには、地雷で足を失った人が集まり、国内の別の地方を追い出された国内避難民の数が増大している。地方に目を移せば、都市と都市を結ぶ道路は、まったく安



ムバンザ・コンゴのオフィス スタッフ全員

全ではなく、物資が届かないでいる。食料はもちろん、医療や教育といった基本的な生活基盤が、行き届いていない。緒方貞子難民高等弁務官は、今年1月の国連安保理の席上、アンゴラを、アフリカでもっとも人道的危機がある国と形容した。

国際機関やNGOのなかでは、アンゴラはもっとも援助が難しい国とされる。その1つが物価の高さ。農業を始めとして国内産業は長引く内戦の影響で、ずたずたにされた。すべて輸出に頼っているといても過言ではない。ゆえに首都ルアンダは、東京以上の物価の高さである。驚くことに、田舎町であるムバンザ・コンゴの食料品は、ほとんど空輸に頼っているためルアンダ以上に高い。もう1つはいまだ十分な安全が確保されていないということ。国内には、1000万個の地雷が埋まったままである。そして輸送の問題。わたしたちNGOは首都近郊の難民キャンプを除いて、ほとんどの活動場所で世界食料計画(WFP)の輸送機に依存している。陸路での移動は安全が確保されていないため、事実上不可能だ。

2. プロジェクト立ち上げ

9月14日、われわれはようやく UNHCR との契約を済ませることができた。本年12月までの4ヶ月のプロジェクトであるが、おそらく来年も引き続き AMDA は同様の事業を実施していくことになるだろう。契約にこぎつけるまでに時間がかかったのには、理由がある。もともと AMDA はムバンザ・コンゴにある州立病院の整備事業をする予定であった。ところが政府側が実は、まったく同様の事業を計画していることが判明し、急速、われわれは UNHCR と政府との交渉のもと、この病院のスタッフのトレーニングや栄養プログラム、ワクチン接種などの事業に変更することになったからだ。いわばハード事業からソフト事業への方向転換である。

まずわれわれが一番はじめにしなければならなかったのは、オフィスの設立であった。以前、この国で AMDA はプロジェクトをしていたが、何もかも撤退していたので、今回はすべてゼロからのスタートであった。オフィス設立とは、要するに、現地政府に必要な手続きをとり、銀行口座の開設をし、スタッフの雇用をするといったことである。

難航したのは、オフィスを見つけることだった。物価が高い上に、家賃を6ヶ月や一年の前払いで請求するので、非常に高額な資金が必要であった。金額以上に、家主との交渉は難しいものだった。突然、家賃を10万円あげてきたり、契約直前になって別の業者に家を貸してしまったり。われわれは常に忍耐を要求された。

最終的に AMDA アンゴラの新しいオフィスは、10月7日に決めることができた。はじめオフィスには何も無く、現地職員を含め私たちスタッフは、文房具やテーブル・いすも無い状態で仕事を続けた。10月23日には、プロジェクトサイトであるムバンザ・コンゴにもオフィスを設立した。このオフィスは、ムバンザ・コンゴでもっとも好条件の家であったが、台所・トイレ・窓といった基本的にすべての

8月24日 アンゴラ入り

(6月に第1回の調査チーム(ハサン・谷合・奥見医師)を派遣している)

8月28日 ジブチよりハサン氏・伊藤医師合流

8月29日 ザイレ州副知事、UNHCR との初会合

9月1日 銀行口座開設

9月12日 UTCAH(政府人道支援局)との会合

9月12日 バングラデシュよりリアコット・ホセイン医師合流

9月12日 保健省との会合

9月14日 UNHCR、MINARS(政府機関)、AMDA で事業実施の契約

9月27日 外務省との会合

9月28日 ムバンザ・コンゴにて、病院関係者、州政府要人との会談

10月4日 UNHCR からプロジェクト資金の支払い

10月7日 ルアンダオフィス設立

10月23日 フィールドオフィス(ムバンザ・コンゴ)設立

10月23日 州立病院へ医薬品の供与

箇所を修復しなければ住めない状態であった。今では、ルアンダのオフィスは、かなり環境も整い始め、岡山の本部とは電子メールでやり取りできる状態になった。現在のところ、ルアンダのオフィスとムバンザ・コンゴのオフィスとは、衛星電話と無線をつかって、交信を進めている。

3. ムバンザ・コンゴ

(Mbanza Congo)

一町の様子と州立病院の現状

この町は、名前が示すように、アンゴラ国内でも北部のコンゴよりの地域に位置する。隣国コンゴ(旧ザイール)からは、わずか60km離れたところである。首都ルアンダからは、約1000キロメートル離れており、小型飛行機で約1時間15分の距離である。人口は、約4万人で、ザイレ州の州都ではあるが、さびれた町との印象がある。この町の歴史は古く、15～16世紀に、サブサハラアフリカで一番古い教会が建てられている。今でもキリスト教の活動は盛んで、ポルトガルなどから来ているシスターが数名活躍している。

町にはこれといって特別なものは何もない。ただ滑走路があるだけの飛行場を中心に、政府の建物が目立つぐらいである。大きな青空市場が一ヶ所あるが、ここ数年陸路での大量輸送が困難であったために、食料品を含め建築資材などほとんどのものが不足あるいは入手不可能である。

しかし、治安状況が改善されたためか、10月には首都から大量の物資を積んだ政府の輸送トラックの隊列が到着し、翌日にはまたたく間に雑貨屋などが町に開店した。

1998年には内戦がひどくなり、この町の住民が隣国のコンゴに難民として流出したり、国内の別の地域に、避難を余儀なくされた。現在、ムバンザ・コンゴは、周辺的安全状況の改善に伴い、コンゴからの帰還難民や周辺の地域に逃げていた地元住民が徐々に戻り始めてきている。ただし、住民の基本的な生活基盤が整っていないため、急ピッチに町の機能が回復しているとは言え、緊急的な支援活動が望まれている。

ここで活動する NGO は、AMDA を含め5つほどある。それぞれが医療、水、農業、教育、住居などの分野で、UNHCR のパートナーシップのもと、プロジェクトを進めている。私たちは10月下旬にオフィス立ち上げをしたわけで、現地ではもっとも新しい NGO である。蛇足ではあるが、はじめオフィスは仕事するどころか住める状態ではなく、この地でプロジェクトをする前にまず、水と発電機による電力の確保を行った。

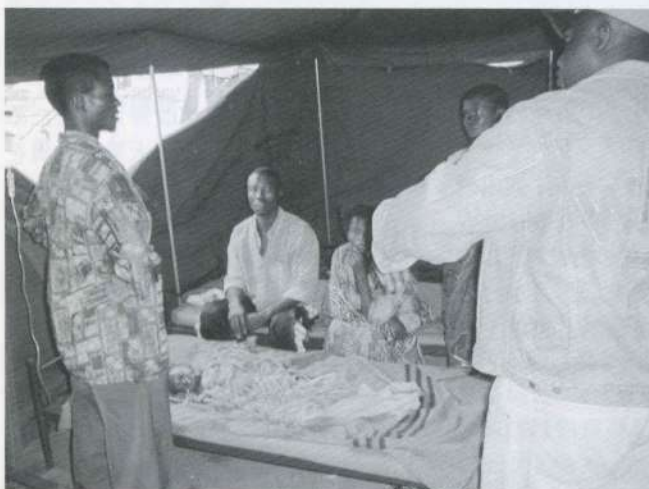
町の中心部には、AMDA の活動場所である州立病院がある。約80床ほどの病院には、産婦人科、小児科、外科、臨床検査室など名前としてそろってはいるが、中身はないない尽く



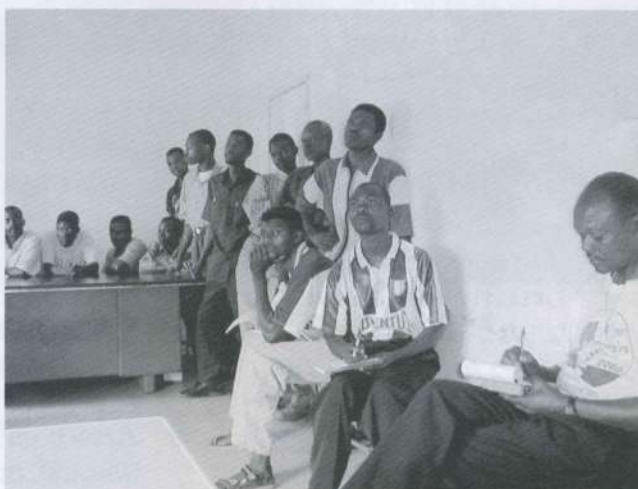
州立病院の玄関



病院へ薬の援助



病院内の仮設テントの中の子ども患者



第1回ヘルストレーニングの受講模様

しで、医薬品はもちろんのこと、ノートやペンなどの事務用品もない。病院には、スタッフが100人ほど登録されているが、政府から給料が十分に支払われていないためか、一部の看護婦などはルアンダや他の都市へ仕事を求めて出てしまっているようである。そもそもこの町には、医師の資格のあるものが1人しかおらず、その医師が州の保健省の役人でもあるため、あちこちに飛びまわっており、この病院にいないことも多い。つまり常駐の医師不在の病院と言えよう。

衛生環境も極めて悪い。現在病院は、政府による改修工事が進められている途中で、何人かの入院患者が、仮設テントでの生活を余儀なくされている。このテントは、昼間太陽が照れば、中はものすごく暑くなり、また一度雨に見舞われると隙間から雨が差し込むという、最悪の環境である。現在は雨季であるため、熱帯地方特有のスコールに見舞われると、患者の健康状態が

気遣われる。入院患者の疾病は、主に結核、黄熱病、眠り病、マラリアなどほとんどが感染症であるが、適切な処置も施されず、患者は病院の中で“放置”された状態である。

このような状態だからこそ、私たちが現地へ赴いて政府に事業の目的と内容を説明したとき、歓迎されたのだと思う。とくに AMDA が常駐の医師を派遣することに対して大いに歓迎された。他の NGO や政府からは、医薬品の供与があっても、それを使いこなす医師の派遣が今まで無かったからである。政府の役人だけではなく、住民がとくに歓迎していることに大きな意味がある。ある一人の婦人は、「AMDA が来てくれて本当に嬉しい、とくに私たち女性は産婦人科医を求めているのです！」と喜びの声を口にした。

11月16日に医療コーディネーターであるリアコット医師による、トレーニングプログラムが始まった。このト

レーニングプログラムというのは、病院の医療スタッフに対する正しい医療知識の普及を図るものである。

援助依存をなくすために、住民の Capacity Building を主眼に入れたプロジェクトが期待されているのである。第1回のクラスは、現地でもっとも恐れられているツエツエ蠅を媒介とする眠り病についての講義であった。

当日は病院スタッフ22人が参加し、約1時間のレッスンと質疑応答となった。当然通訳を介しながらのレッスンであったが、皆真剣に耳を傾けていた。ただ、ノートとペンがないためにメモをとれるものが少なかった。そこで私たちは学習用に最低限必要な文房具を病院スタッフ全員に送ることに決めた。またなぜだか分からないが、参加者全員が男性であった。女性のスタッフが半数以上いるはずなので、今後は女性の参加も促すことも考えなければならない。

離任にあたって—「もがき、助けられながら」

AMDA ミャンマー駐在代表 大森 佳世

2000年10月をもって、2年3ヶ月にわたるミャンマーでの任期を終了いたしました。これまでの仕事や生活を振り返って、報告したいと思います。

<感想>

NGOにしろ何にしろ、人は仕事をしていく上で、また生きていく上で、何らかの考えを持って生きています。団体としての、そして自分という1人の人間としての信念を含めた性質を形

成するには、その土台となる多くの情報がインプットされなければなりません。そのためにはできるだけ多くの人と会い、意見を聞き、事実を把握する作業を、人間は知らず知らずのうちに、営んでいるのでしょう。自分の考えや生き方はさておき、ここではAMDA ミャンマーという団体の信念を伝えたいと思います。

AMDA ミャンマーの体質は、AMDA 本部、ひいては菅波代表の意向を大きく汲んだものであることに間違いあり

ません。国連NGOに認定された医療NGOとして、世界に広がるAMDAネットワークを担う一事務所として、尊敬と信頼の国際ネットワークに対応し、プロ意識を持ちながら、地域の信頼性を得て、地元と手を取り合い、地元のためになる活動を推進していくことです。その中で、「現地の文化の尊重」「現地の自立の支援」「相互の信頼関係の醸成」は常に念頭にあります。こういうAMDAの性格、自由に意見を出して議論を尽くす風通しのいい空

筆者が任期中（1998年～2000年）に関わったAMDA ミャンマープロジェクト

1) 僻地医療向上プロジェクト

(マンダレー管区メッティーラタウンシップ)

a) 巡回診療プログラム

*産経新聞の「明美ちゃん基金」のご協力によって、ミャンマーでは治療法がない心臓病の子どもを、日本へ呼んで手術するという話を、99年より進めていました。この僻地巡回診療の患者の中から病状が悪く、かつ日本への輸送にも耐える子どもで、親や家族の理解を得られるなどの条件を満たす子どもを探していました。日本の受け入れ側の準備も整い、ようやく2001年頃には、ヤダナウーちゃん（7つ）というマヂズ村に住むかわいい女の子が、お父さんと共に来日し、治療を受ける予定です。

b) AMDA 診療所プログラム

c) 栄養指導と給食プログラム

d) マイクロクレジット(少額融資)による収入向上プログラム

2) 浄水供給プロジェクト(メッティーラタウンシップ)

…MIS (国際協力の会) と連携

a) 浄水機設置プログラム

b) ミャンマー人水技術者の日本への研修プログラム

c) 保健衛生教育プログラム

3) 教育普及プロジェクト(メッティーラタウンシップ)

…ABA (アジア仏教徒協会) と連携

a) 僧院学校建設プログラム

b) 家具供給プログラム

c) ボランティアによる指導プログラム

4) 母子保健促進プロジェクト(メッティーラタウンシップ)

a) 子ども病院の開設と医療器材の供給プログラム

b) 医療スタッフの日緬交換プログラム

c) 緊急基金プログラム (診療費補助・患者輸送)

d) 栄養コーナーの設置と栄養士育成プログラム

5) 防災学校建設と防災訓練プロジェクト (マンダレー管区チャパタウンタウンシップ)

a) 防災学校兼僧院学校建設プログラム

b) 10村への防災設備供給プログラム

c) 防災訓練プログラム

6) 医療専門家育成プロジェクト (ヤンゴン)

a) 人材育成センター建設プログラム

b) 伝統医育成と日緬中交換プログラム

c) 基礎保健知識普及と連携したマイクロクレジット専門家育成プログラム

7) 水供給プロジェクト (バコック)

8) ASEAN地域自然災害緊急救援プロジェクト (ASEAN地域内)

9) HIV/AIDSプロジェクト (メッティーラ、チャパタウン、マグウェイ管区マグウェイタウンシップ)

10) PHCプロジェクト (チャパタウン、マグウェイタウンシップ)

*バゴーでの災害支援プロジェクト (99年6月終了)

*マンダレーの北のマダヤでのハンセン病棟内供水プロジェクト (97年終了)

来年度からはこれらのプロジェクトをさらに統括し、国内ではヤンゴン事務所を中心に、メッティーラの他に、チャパタウン、マグウェイ地域に事務所を開設し、合計4事務所が5地域(事務所所在地に加えて、バコック地域)のプロジェクトを遂行する計画です。ヤンゴン事務所では全プロジェクトの統括とプロジェクトNo. 6、7、8を担当し、フィールドの3事務所では、残りのすべてを1つに統括し、拡大深化していく方向です。

以上のプロジェクトの詳細については3月号でミャンマー特集を組み報告します。

気、そしてこういう土壌を創出する代表の人柄に魅せられて、私たち AMDA スタッフは集まっているのだと思います。

そしてミャンマーでは立ち上げにご尽力された吉岡先生。言葉ではなく、行動で実現させた人です。言葉では何だかんだ言っても、実際に行動できない人、途中で挫折してしまう人はいくらでもいます。それでもその気持ちだけでも立派なのですが、その中で、実際にこの国のために2年という時間をつくり、有言実行された姿は、心から敬服します。ミャンマーに来られるたびに、また日本へ帰国するたびに会って、ふざけながらもきちんと意見を交わします。お互いに真剣勝負です。また、桑田先生のアドバイスは、実務面でも助かります。帰国された後も、日本にいれば必ず会い、そしてミャンマーへも何回か来て下さり、その度にポツポツと「こういうのいいかなあ。」「ああでもない、こおでもない。」と2人で頭をつき合わせては、仕事のこと、生活のこと、語り合います。

その上で、ミャンマーで活動するにあたり、常に忘れてはならないことは、「軍事政権下での活動」ということです。何でもかんでも報告、報告、報告。そして許可がなければ自分たちのプロジェクトサイトにさえ移動できない現実。そういう状況の困難さは、この国で活動している NGO の数の極端な少なさ（全部で30団体ほど）にも現れているように思います。例をあげればキリがありません。半年くらいたったある日、メッティエラへ30分くらい電話をかけ続けてようやく通じたときに、日本語が話せるスタッフのやさしい声を聞き、「ウソーテン…」と名前をいうや否や、ポロポロと涙が流れて、止まらなかったこともありました。1人で責任を持ち、知らず知らずのうちにたまった緊張感。「大丈夫。私たちがついていきますから。安心して下さい。」と、いつもはこちらからの指示を受けて行動しているスタッフの優しい言葉を聞いて、切なくなったこともありました。人のやさしさを感じずに、ミャンマーで活動した日はないでしょう。

それでもここで仕事したいのは、「開発途上国の中でも極端に高い乳児死亡率」をかかえるミャンマーという



AMDA ミャンマー事務所（メッティエラ）のスタッフと
前列右から5人目が筆者

国の現状に対して、何とかしたいという気持ちがあるからです。「私たちのターゲットはあくまでもコミュニティーであり、打倒政府ではなく、打倒病気である。政府がどうであろうと、そこは AMDA という団体の目的としては関係がない。目的を遂行するために障害となる活動はしない。」欧米の民主主義の価値観をアジアという土壌に押し付けないで欲しい。日本の NGO として、アジアに位置する国の一員として、独自性を持った活動をする。自分が意識しようとしまいと、AMDA は日本の NGO として人から見られているわけで、そういう意味では日本を代表しているつもりである。「その目標とする民主主義自体にも、140近い少数民族をかかえるこの地域で、根付かせようとするのに対して、疑問がないわけではない。自由をさげんで銃に洗われているアメリカしかり、コソボしかり、インドネシアしかり。」様々な局面で、議論してきた内容です。これが今の、AMDA ミャンマーの精神的真髄になっていると思います。

こうして仕事をするには、自分に余裕がないとできません。その意味で、仕事とプライベートのそれぞれの時間を大切にするためにも、途中からは仕事だけに没頭することなく、息抜きや自分の時間を大切に使えたことが、仕事の面でも幸いだったと思います。いつもおいしい日本食を作ってくれて、笑顔で話しかけてくれるヤンゴン事務所のラシーちゃんは、本当に神様のようなでした。ときにはミャンマー料理を教えてくださいました。そして運転手のミ

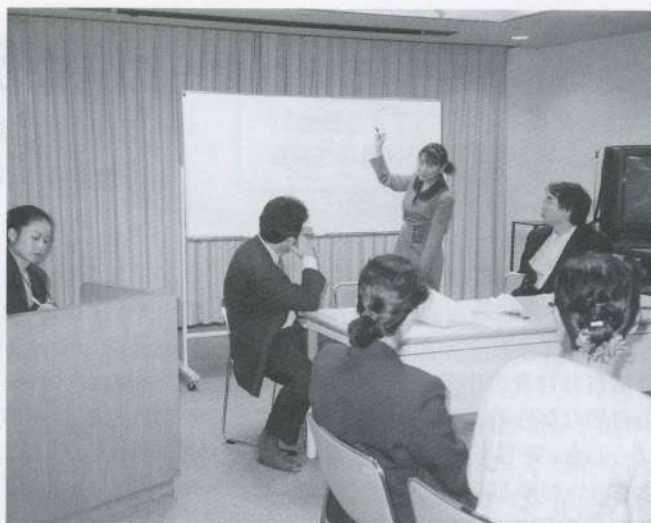
ンミン、夜警のジョージョなど、楽しい仲間にも囲まれていました。相棒のナンセンは、地理的には離れても、心の上では永遠の相棒です。

プロジェクトを推進していく上で、医療スタッフではない私にはわからないことが山ほどありました。そのたびに深い見識のある上田先生や吉岡先生、ソーナイ医師など、それがわかる医師に聞いて、解決できたことも幸運でした。

ミャンマーでの生活は、大変な面もたくさんありました。停電が激しかった頃はパソコンも冷蔵庫もエアコン、FAX も使えない状況でも、日常業務をストップすることはできません。暗闇の中で作業をしたり、電気がある夜中に徹夜して、申請書を書いたこともありました。寒い冬に夜風に吹かれながら、蠟燭の灯りのもとに集まって、人々と議論を交わしたこともありました。ダニや虫に噛まれると、痛かったり痒かったりする上に、常に傷跡が残ってしまっています。ねずみが走るガタガタの列車で、1日中揺られて目的地まで到達しなければならなかったこともありました。それでも到着できるとうれしいのは、国内の至るところにある検問所で、2週間前に申請して取得した移動許可書を所持していても、足止めを食らうことが頻繁だからです。ふと間違えると崖から真っ逆さまという大きな石だらけの山道を、霧のために1メートルしか視界がない中、進んだこともありました。度重なるタイヤのバンクで時間がかかりすぎて、それでも検問のためにも夜道を進むしか



AMDA ミャンマー子ども病院開所式でのアトラクション (1999.11)



2年3ヶ月の任期を終了し、帰国報告をする筆者 (2000.11)

なく、ゲリラの存在に脅えながら当局の監視の下、一晩かけて進みました。いくらお腹の調子が悪くても、相手から出された油の多い料理や山羊のお乳を右手で食べなければならず、意を決して食べ物に手を出したこともあります。泥棒に入られたこともありました。地方で体調を壊して病院に担ぎ込まれたときは、唯一の病院と呼ばれる施設が窓ガラスが割れて薄汚れたベッドが並ぶ中に寝かされて、点滴の針や薬すらないため自分たちで薬局へ走り、買わなければなりません。雨期には膝まで水につかりながら、移動を余儀なくされたこともあります。どこへ行っても当局に監視され、自由に行動ができないこともありました。プロジェクトで大きなお金が動くため、スタッフの間で不正が生じて言い争いになり、どちらもひげずに怖い思いをしたこともありました。そして一人がかかえる仕事量の多さに睡眠不足が続き、責任の重さに頭が混乱しそうなきもしばしばでした。プロジェクトサイトへの道の悪さ、通信事情の悪さなど、大変なことをあげれば、おそらくキリがありません。

しかし、こうした状況に始めはとまどいつつも、苦しいと感じたことはありませんでした。何とか打開策を考えたり、相手とギリギリの交渉をすることはかなり楽しく感じられたし、またいくらかがいていても、必ずどこかで誰かに助けられ、励ましていただけたからです。

そして、仕事以外でミャンマーを楽しめました。この国でどれほどの距離

を移動したことでしょう。移動の自由が厳しく制限されている中で、民間人でありながら、仕事やプライベートで、すべての州と管区や、国境地帯を訪れることができました。戦時中の日本軍の情報将校でさえ、そこまで訪れることはできなかつたろうとも言われています。そこでその地域の市場、お墓、ロンジー、モヒンガー（ミャンマー人が朝食にとる煮麺）、ダンスなどと出会いました。行く道が困難なだけに、到着先の村で出会うものは一段と新鮮に感じますし、少数民族が伝統を固守しようとする気持ちと外国から入る新しい概念との衝突について共に考えさせられ、多民族国家の懐の深さ、そして多くの野生動物や自然のすばらしさにも感銘を受けました。

祝日にはヤンゴンをはじめ、いろいろな場所で、ミャンマー人と一緒に、宗教的・民族的な行事も楽しめました。月の半分くらいを滞在するヤンゴンでの生活は、仕事が終わるとスポーツジム、テニス、水泳を楽しめました。まれにマッサージやディスコ、ビリヤードにも行きました。竖琴や舞踊を細々と習い、ミャンマー文化も楽しめました。逆に地方に行くと、たつぷりと読書の時間を持てます。また、ミャンマー映画やビデオも楽しめます。後半は日本企業の方々とのお付き合いも盛んになり、いろいろな投資のお話なども聞かせていただけました。そうした色々な場面をもとに、一冊の詩集も完成しました。

私事になりますが、この地で生涯の伴侶と出会えたことも、幸運でした。

お互いに元々はアフリカを希望しており、ミャンマー赴任は流れに乗って何となくという感じだったのですが、仕事で貴重な鍛錬を積みさせていただけた上に、こういう出会いに恵まれて、幸せです。

2年3ヶ月を過ごしたミャンマーでの任期を終え、今はやっとホッとしような、それでいて少し寂しい気持ちもしています。毎日が真剣勝負だったような、それでいて毎日がパラダイスだったような、不思議な感覚がしています。そしてまたいつか、ここへ戻って来るような気がします。そんなミャンマーに少しでも多くの人に関心を持ち、「ミャンマーの人って本当にいいね。」と言って下さると、心からうれしく思います。自分が住ませてもらっている国の人たちのことを、すばらしいと言われると、やはりうれしく感じます。

いつも助けてくれたミャンマーの人たち、日本から私の活動を支えて下さったAMDAの関係者やご支援いただいた方々、そして私の活動に理解を示してくれた家族に、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。何のとりえもない私ですが、健康に恵まれたことに対して感謝し、また次の仕事に望みたいと思います。1月からは待望のアフリカです。どんなことが待ち受けているのか、楽しみです。これからもがんばりますので、皆さん、またご支援をよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。

ミャンマーの人達が教えてくれた母性

助産婦 河崎 弥江

そもそも、海外旅行さえしたことがない私が、何故途上国の母性に足を踏み入れることになったのか、事の始まりは自分自身の出産にあった。なんとも自然な女性の身体のメカニズムのすばらしさ、そして我が子を思う心の偉大さ、いわゆる母性に魅せられた。それだけの理由で助産婦になろうと決め、育児の真っ只中助産婦の資格を得た。それほどまでに魅力を感じた母性だが、病院に勤務すると、その医療介入の多さと業務に追われ、時に母性の本来あるべき姿を二の次に感じてしまう悲しい自分であった。物の無い医療の中で、自然な出産が見たい。ただそんな思いから今回の活動に踏み切る事になった。

私は正直言ってボランティア精神は持ち備えていない。2週間という短期の中、人の為ではなく、自分自身の為という気持ちでミャンマーへ来た。

マジズ村という貧しい村の助産婦との関わりをとおして心に残る体験の一部を紹介する。

母性の偉大さを感じた

助産院を訪れた時、産まれたばかりのかわいい双子ちゃんが入院していた。その家庭はとても貧しく、次の食事さえ摂れるかどうかかわからないほどの状況。上には4人の子供がおり、合計8人家族。助産婦さんは「双子のうち一人を誰かに譲っては」という話をもちかけた。返ってきた返事は「自分は食わずに死んでもいいから自分の傍らから離したくない。」だった。これぞ母性の偉大さ、子供が何人いようとそれは変わりはない。

愛情に包まれた村

助産所では毎週ボランティアの医者か妊婦検診にやってくる。その日もインド系の濃い顔の医者が検診へ出かけた。産婦人科の医者ではないらしい。その医者は助産所へ向かう途中、妊婦へのおみやげに黒砂糖を購入していた。貧血の予防の為とのことだった。

日本でも妊婦には貧血予防の為の食事指導はしているが、その食べ物を手に入れることができるかなんてことまでは考えない。しかしこの村は違う。

帰り際その医者は、その日の検診で気になる妊婦の家庭訪問をした。一日中立ち仕事をしており流産しかかっている妊婦に、家族を含めた指導をしたいとの理由。ボランティアでここまでやってのけるこのインド系の医者の精神のひとかけらでも日本へ持ち帰りたいと思った。と同時にこの医者の行動をボランティアという言葉で片付けたくないとも思った。ボランティアという言葉があるからいけないのだ。ますますこの言葉が嫌いになってしまった。

たくさんの愛情に包まれたこの村の空気は気持ちが良く、居心地が良かった。

たくさんの笑いの中で産声をあげたベビー

愛情に包まれたこの村で、お産が見たい。その思いが実り、ある初産婦さんのお産に立ち会うことができた。お産の時は5人の助産婦が関わり大きな声で声援したり、時には冗談を言ったりして大きな笑い声もあった。言葉は通じないが、その笑うお産の中に立っている自分がとても嬉しくて一緒に笑った。出産は国境のない同じ喜びなんだということを実感した。時間は夜中



の3時、この空間だけが意気揚々と動いていた。そしてかわいい男の子が大きな産声をあげた。産声の中でいつまでも温かい空気が流れた。同じ心を持つ者達が一つになれた喜びは大きかった。

母性とは、どこの国であろうが、医療介入があろうとなかろうと、なにも変わるものではない。答えは簡単だった。しかしそれを教えてくれたのは、母になったいい顔を見せてくれた彼女、助産婦さん達、そしてミャンマーの人達だった。母子に限らず、人が支え合って生きていくことの大切さも教えてくれた。助産婦の立場としてでなく、人間として生きていく上で、温かいミャンマーでの体験を忘れないでいたい。

人

12

AMDA インターナショナル名誉顧問紹介

Dr. Khan M. Zaman

AMDA インターナショナル事務局長

AMDA インターナショナルはAMDA の名誉顧問をお願いしている方々をシリーズで紹介している。今回はその第12回目として、日本予防外交センター会長である明石康氏を紹介する。



明石 康 氏
日本予防外交センター会長

明石康氏は1957年2月、日本人の国連専門職員第1号として国連事務局の政治安保事務局政務担当官となった。カンボジア事務総長特別代表、旧ユーゴスラビア事務総長特別代表などを経て、1999年7月に日本予防外交センター会長に就任。1931年生まれ。略歴は下記の通り：

学歴・研究活動

- 1954年 東京大学教養学部教養学科アメリカ科卒業。
- 1954～55年 東京大学大学院で国際関係を研究。国際基督教大学講師。
- 1956年 フルブライト留学生としてバージニア大学大学院で修士号取得。その後フレッチャー法律外交大学院及びコロンビア大学大学院博士課程で国際問題を専攻。
- 1998年3月 立命館大学から国際関係で博士号を授与される。

客員教授歴

国際基督教大学（1969、1990年）、青山学院大学（1989年）、立命館大学（1993年から現在）、東洋英和女学院大学（1998年から現在）、東京大学（2000年）。以上の大学の大学院で履修単位対象となる科目を担当。

講師歴

ジョンズ・ホプキンス大学国際問題高等研究所、国際問題高等研究所（SWI、ジュネーブ）、コロンビア大学、バージニア大学、フレッチャー法律外交大学院、プリンストン大学、エール大学、ハーバード大学、ニューヨーク大学、東京大学、東洋英知女学院大学、上智大学など、多数の高等教育機関での講師歴を持つ。

職歴

- 1957年2月 国連事務局政治安保事務局政務担当官となる。その後特別政治問題担当事務次長室、事務総長官房などで勤務。
- 1966年～ タイ・カンボジア紛争の調停などを担当。国連大学設置委員会事務長などを務める。
- 1974年～ 国連日本政府代表部参事官となり、以来公使、大使を歴任。国連総会日本代表、国連開発計画管理理事会予算委員会委員長などを務める。
- 1979年5月 国連広報担当事務次長に就任する。
- 1987年3月 軍縮担当事務次長就任。
- 1992年1月 カンボジア事務総長特別代表に就任。
- 1994年1月 旧ユーゴスラビア事務総長特別代表に就任。
- 1995年11月 事務総長特別顧問。
- 1996年3月 人道問題担当事務次長。
- 1997年12月 国連を退官。
- 1998年4月～1999年2月 広島市立大学広島平和研究所初代所長を務める。
- 1999年7月 日本予防外交センター会長に就任。人口問題協議会会長、日本国際連合学会理事長も務める。

著書

- 「国際連合—その光と影」（岩波書店、昭和40年初版）
- 「国連ビルの窓から」（昭和59年サイマル出版会）
- 「国連から見た世界」（平成4年サイマル出版会）
- 「An Agenda for Hope — The UN in a New Era」（平成5年サイマル出版会）
- 「忍耐と希望—カンボジアの560日」（平成7年朝日新聞社）
- 「平和への架け橋」（平成8年講談社）

他に多くの論文を海外・国内の雑誌や定期刊行誌で発表している。

賞罰

- 平成4年 第18回経済界大賞特別賞
- 平成5年 秋田県名誉県民賞
- 平成5年 第2回朝河貫一賞
- 平成6年 第10回在米日本商工会議所特別功労賞（日本人初）
- 平成8年 第3回読売国際協力賞
- 平成10年 外務大臣表彰

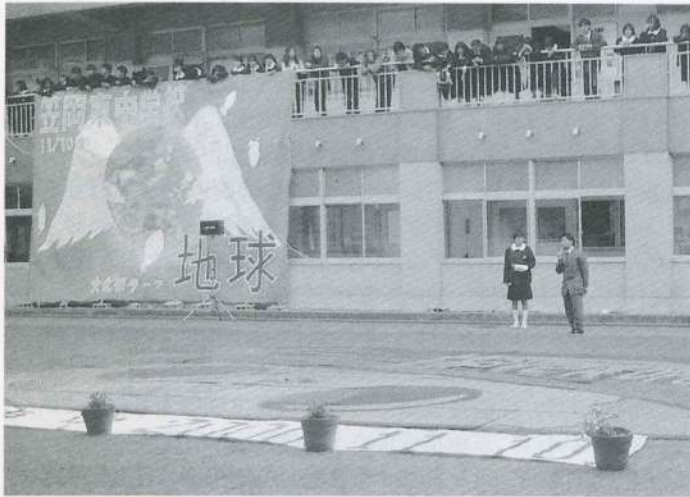
笠岡東中

文化祭「1円玉・5円玉アート」で募金

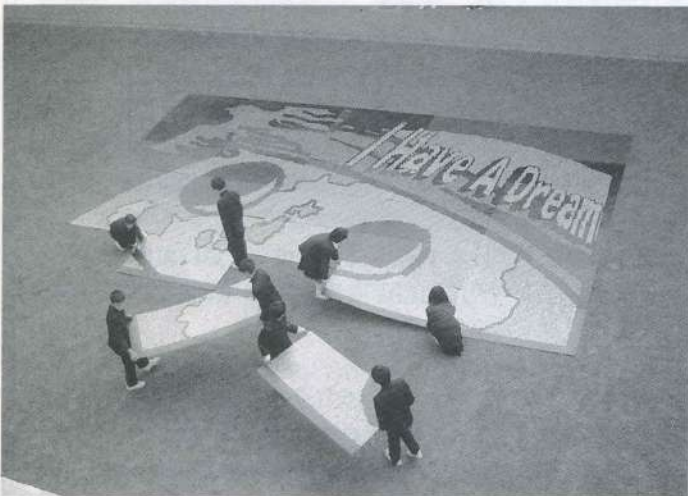
笠岡市立笠岡東中学校 生徒会顧問

大重 義法

(文責：藤井逸子)



中庭アート完成イベントに参加した AMDA スタッフ



担当した各パーツを組み合わせる生徒達



完成したコインアート「地球」

11月10日、笠岡市立笠岡東中学校の文化祭は「中庭アート完成イベント」で生徒、保護者、教師が一体となった盛り上がりを見せました。

3年前から学校全体で地域の清掃、地区内の施設での介護補助など様々なボランティア活動に取り組んでいますが、ボランティアの幅を広げようと昨年の文化祭では1円玉・5円玉アートで募金活動を行い「AMDA ネパールこども病院へ救急車を贈る会」に寄付しました。(詳細はAMDAジャーナル2000年7月号)

ことしの夏休みには生徒会役員の生徒7名と生徒会顧問の教師でAMDA本部へ伺い会員情報局長の小池氏からAMDAの活動やボランティア活動の意義についてお話を頂きました。その後生徒会で何度も話し合い、文化祭のテーマを「地球」と決めました。地球規模のボランティア活動として昨年に引き続き、1円玉・5円玉アートで募金活動を行い、その募金をAMDAに寄付することにしました。

中庭アート完成イベントにはAMDAから前プロジェクト推進局長の岡安利治氏に来て頂きアフリカのザンビアで展開されている支援活動やAMDAの活動について話して頂きました。その後生徒会から募金の目録を贈らせていただきましたが、当日も募金があり、最終的に80,422円を寄付することができました。

私達教師は生徒達の「自分達の手で全地球的規模のボランティア活動を展開していこう」という思いが、AMDAを通じて世界に広がったことを実感できました。

—— 生徒の感想 ——

「大成功 1円玉・5円玉アート」 生徒会長：長岡 美起

私は1円玉・5円玉アートの企画・運営を他の生徒会総務の人達と一緒に担当しました。中庭アート完成イベントでは司会もしました。生徒と先生、そして保護者の心が一つになって盛り上がり、とても良いイベントになったと思います。アートの準備や製作はとても大変だったけれど本当にやって良かったです。

「感動のアラシ！」3年生 男子

アートの完成まで苦勞の連続だった。クラスごとの展示との両立、1円玉不足etc.でも、アートの完成には感動した。しかもコピーは僕が考えた「I have a dream」が選ばれたのだ。恥ずかしいなんて気持ちはなかった。ただ、ただうれしかった。苦勞した甲斐があったと言うものだ。本当に良かったよ、アート！感動をありがとう！！

デザインを考えた2年生 女子

私はこの文化祭でみんなが地球や世界に目を向けて考えることができるようになって良かったと思います。そして、これからもこの経験を活かして生活やさまざまな問題点についても考えていってこれれば良いなあと思います。

「何の絵かな？」 2年生 女子

文化祭当日「中庭アートはいったい何の絵なんだろう？」とドキドキ！並べている人たちもどんな絵に仕上がるのが全然わからずに自分達の担当パーツを運んでいる。

絵は地球と鳥と「I have a dream」の文字。「いい言葉だな。」と思った。

「アートが完成して」 3年生 女子

アートが完成した瞬間のみんなの歓声と拍手と笑顔がずっと心に残っています。そしてこのイベントのテーマソング「BLUE SKY」を歌った「うた歌い隊」の歌声は学校全体に響き渡る最高の歌声でした。

笠岡東中学校アート募金

前プロジェクト推進局長
岡安利治

「こんな楽しい文化祭が中学生のときにできたら楽しかったらうな」というのが私の第一印象でした。2000年11月10日、岡山県笠岡東中学校で文化祭が開かれ、そのなかでAMDAを支援する募金イベントがあり、贈呈式に招かれました。中学校の中庭をメイン会場として、校舎の1階から3階は各クラスの展示が行なわれた。

通常、贈呈式といわれると、かしくまった雰囲気の中、募金をうけるという形式であるが、今回は楽しみながら募金をうけさせていただきました。

笠岡東中学校の皆さんは、1円玉と5円玉をまず全校で募金して、その募金をもとに、全体で一枚のコインアート(硬貨による地上絵)を作成した。この絵は生徒から公募して選ばれた1枚を1年生から3年生までのクラスごとに分担してそれぞれのボードにコインアートを作成していく。

そのため各クラスの作成段階では最終的にどのようなアートが完成するのか、わからないという楽しみがあったそうである。

贈呈式ではザンビアへの支援ということで簡潔にAMDAのザンビア活動を紹介したが、生徒からも元気のいい質問が飛び出し、楽しい雰囲気のなかで式が行われた。

文化祭終了後にボードに貼られた1円玉や5円玉が剥がされ、計80,422円の募金総額がAMDAに送られてきた。

この募金はザンビアでAMDAが行なっている貧困層の人々を対象にした職業訓練、識字教育、コミュニティ農園等の事業の資金として使われる予定である。12月10日から2002年3月まで私自身、JICAと連携しているザンビア国プライマリーヘルスケア事業に派遣されますので、資金の活用状況を確認していくつもりです。

「楽しみながら国際協力」そんな言葉がふさわしい笠岡東中学校のイベントでした。

笠岡中学校関係者の皆様はこの誌面をお借りしまして御礼申し上げます。

AMDA 高校生会

あいフェスティバルに参加



民族衣装で記念撮影の高校生会メンバー

奥壁恭子・三宅ちか子・渋谷未来・川上侑希
小藪美実・宇田由美子・大塚瑛子・一般参加者

私たちAMDA高校生会は10月28・29日に岡山市内の下石井公園で行われた「あいフェスティバル」に参加しました。「あいフェスティバル」というのは、日本人と外国人が共に住みよい街づくりを進めようという企画のもと、岡山在住の外国人たちがそれぞれ店(ブース)を出し自分たちの国の特産品や食べ物などを販売し、国際交流を深めようというイベントでした。私たちは各国ブースに分かれて店のお手伝いをしました。

この2日間は悪天候にもかかわらずたくさんのお客さんが来ていてもう大繁盛でした。高校生会のほとんどのメンバーは民族衣装のファッションショーにも挑戦しました。普段絶対に着ることのできないものだったので、すごくわくわくしました。(ちなみに僕はモンゴルでした。)

この「あいフェスティバル」を通じて日本人、外国人を問わずたくさんのお友達ができ、人と人との輪が大きく広がりました。そして何よりも私たちAMDA高校生会の結束が前にも増して深まったように思いました。

この2日間はとても忙しかったけど、楽しい2日間でした。来年も是非とも参加したいです。

川上 侑希

平成 13 年 1 月 医療通訳養成講座 受講生募集のお知らせ

AMDA 神奈川支部 代表 小林 米幸

11 月より再び来年 9 月まで毎月一回のペースで医療通訳養成講座を開催いたしております。毎回、各分野の専門家に「やさしい日本語」専門分野や専門用語について講義をいただきます。受講者の資格はとくにありませんが、日常会話程度の何らかの外国語を話すことができれば結構です。単に興味があるだけという方も歓迎いたします。

1 月テーマ 「外国人と予防接種、定期検診など保健所の仕事」

担当 中沢由江（横浜市瀬谷保健福祉事務所保健婦、AMDA 会員）

日時 1 月 20 日（土）午後 1 時より 3 時

場所 小林国際クリニック（小田急江ノ島線鶴間駅下車徒歩 3 分）

電話 046-263-1380

参加費 500 円

小林国際クリニック FAX 046-263-0919（連絡先を記載してください）

電話 046-263-1380

* 水曜日、日・祭日は休診です。

11 月度の医療通訳養成講座報告

柘植 靖子

11 月度の医療通訳養成講座が、11 月 12 日（日）大和市の小林国際クリニックで行われた。

テーマは、「タイ人患者のケア、文化と考え方」について。参加者は 7 名。講師は、日本在住のタイ人看護婦、心光スリバウンさん。心光さんは、AMDA 国際医療情報センターのタイ人エイズプロジェクト担当で、相談を受け、病院を訪れたり、帰国の手続きのため大使館に出向くなど、HIV 患者の総合的なケアをしている。

タイ人患者をケアする際に知っておくべき事柄

1. 教育と言語

50 歳以下の方は、義務教育として小学校で勉強しているが、50 歳以上は文字の書けない人が殆ど。ローマ字が書けない人も多いので、問診表の記入などが困難。

2. 宗教

80% 以上が仏教徒。

男性は、魔除けの意味で上半身に刺青をし、プラクルアンという仏像のペンダントを身につけ、大切にしている。

3. 入浴

水浴び、またはシャワーを毎日浴びる。浴槽に入る習慣、人と一緒に入浴する習慣はない。

4. 在日タイ人の生活と医療問題

特にオーバーステイの貧しい人たちは、不規則な生活の

上、1 つのアパートに大勢で暮らしている場合が多く、衛生状態もよくない。

オーバーステイで保険に入れない人が多く、日給で生活している人は特に、通院のために休むことができない。日常会話はできても、医療用語は難しく、病名や病状などの日本語が理解できない。

薬に関しては、自己管理志向が強く、自分で量を調節したり、自分の判断で知人に譲ってしまうこともある。

5. タイの医療制度

国立と私立の病院がある。

医療費は医師が自ら決めるので、人気や経験、知名度によってさまざま。

バンコクには日本語の通じる病院も多い。

6. タブー

子供の頭をなでる。

タイではシャツの上から聴診器をあてるので、女性の診察は特に慎重に。

7. 妊娠・出産

日本の保険制度、母子手帳などを知らない人が多い。定期検診を受けず、出産直前まで来院しない場合もある。

8. タイ人に多い疾患

寄生虫疾患、マラリア、結核、デング熱、HIV…など感染症が多いため、予防接種に関しては日本人よりも積極的。

AMDA 国際医療情報センターのご案内

在日外国人が日本人と変わらぬ医療を受けられるよう、電話で医療情報提供を行っています。

センター東京 TEL: 03-5285-8088

センター関西 TEL: 06-6636-2333

【対応言語・時間】

【対応言語・時間】

英語・中国語・スペイン語・韓国語・タイ語:

英語・スペイン語:

月曜日～金曜日 9:00 ~ 17:00

月曜日～金曜日 9:00 ~ 17:00

ポルトガル語: 月、水、金曜日 9:00 ~ 17:00

ポルトガル語/中国語:

フィリピン語: 水曜日 9:00 ~ 13:00

曜日により対応可。事前にお問い合わせください。

ペルシャ語: 月曜日 9:00 ~ 13:00

ホームページ <http://www.osk.3web.ne.jp/amdack/>

事務局便り

21世紀を迎え、17年目に入ったAMDAの活動も大きな広がりをめざしております。

開発途上国における長期的活動の展開が実施できましたのも、AMDAを理解しご支援下さった皆様のお陰とスタッフ一同感謝しております。ありがとうございます。

皆様もお気づきと思いますが、今年からの特定非営利活動法人としての法人運営移行開始に伴いまして、部局名称等の変更があります。例えば、プロジェクト推進局をコミュニティサービス局と変更、アムダ インターナショナル事務局の新設等多々ありますが、徐々に紹介していきたいと思っております。

どうぞ今後共変わらぬご支援賜りますようお願いいたします。

国際公益活動を支えるご寄付のお願い

AMDAの国際的な人道支援活動を支えるのは皆様からのご寄付です。緊急救援、地域保健、生活向上支援等々、各地で様々な活動を実施継続するためのご寄付をよろしくお願いいたします。

綴じ込みの郵便払込取扱票をご使用いただくと、手数料はかかりません。

また、特定の国、活動種類、プロジェクトをご支援下さる場合は、払込票の通信欄に明記して下さい。

特定の国 インド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、ミャンマー、アンゴラ、ケニア、ザンビア、ジブチ、ルワンダ、コソボ自治州、ボリビア、ホンジュラス

活動種類 緊急救援、地域医療、子ども病院、保健衛生教育、人材育成、教育、自立支援

プロジェクト プロジェクト名については、右のAMDA活動一覧をご覧ください。

※ご寄付に関するお問い合わせは、総務会計局までお願いいたします。

電話 086-284-6051 FAX 086-284-8959

Eメール webmaster@amda.or.jp

お知らせ

* 1月5日 (金)

21世紀鍋 (2,100食が一般の皆さんに振る舞われます)
山陽放送で16:00より生放送
AMDAブースにおいてパネル展

場所 岡山市クレドビル前
問い合わせ先 山陽放送

* 1月20日 (土) ~ 21日 (日)

国際協力・NGO活動理解促進事業
「NGO こんにちは! NGO屋台村」
NGO活動紹介、NGO交流会
(昨年に引き続きAMDAも参加)

場所 札幌市生涯学習総合センターちえりあ

時間 20日 13:00 ~ 18:30
21日 10:00 ~ 17:00

問い合わせ先
財団法人札幌国際プラザ
市民交流課 011-211-2105

人・海外往来

2000年10月16日~11月15日

アジア	ネパール ミャンマー JICA フィリピン カンボジア	辻井美由記 (インターン) 高野 篤 (医師) 鈴木 俊介 (調整員) 若山由紀子 (医師) 上住 純子 (看護婦) 小林 哲也 (新駐在代表) 野村 由香 (看護婦) 和田 宣子 (管理栄養士) 河崎 弥江 (看護婦) 九里 武晃 (医師) 藤野 康之 (調整員) 濱田 一壽 (医師) 菅波 茂 (AMDA インターナショナル 理事長) F.P.Flores (AMDA インターナショナル 副理事長) K.M.Zaman (AMDA インターナショナル 事務局長) 小平 雄一 (AMDA インターナショナル 事務局) 鈴木 剛史 (コミュニティサービス局) 小西 司 (AMDA インターナショナル 事務局) 高瀬かおり (AMDA インターナショナル 事務局) 川村 栄次 (駐在代表) 伴場 賢一 (コミュニティサービス局)
ヨーロッパ	コンゴ	濱田 祐子 (駐在副代表)
アフリカ	ケニア アンゴラ ジブチ JICA ザンビア	林 信秀 (地域事務所代表) 石原 聡 (調整員) 岸田 典子 (コミュニティサービス局) 谷合 正明 (駐在代表) 田中 一弘 (総務会計) 伊藤まり子 (医師) 佐々木 諭 (調整員) 妹尾 美樹 (保健教育) 広田 眞美 (公衆衛生) 岡安 利治 (調整員)
中南米	ホンジュラス	前田あゆみ (駐在代表)

AMDA Journal に関するお問い合わせは、AMDA 会員情報局 TEL 086-284-8104 まで

*ご入会、会費、ご寄付、その他ご購入のための振込は、本誌綴じ込みの郵便振替用紙をご使用下さい。連絡欄に振込目的を明記して下さい。

*クレジットカード (全日信販のAMDAカード) での会費納入方法もあります。

AMDAカードについてのお問い合わせは、
全日信販株式会社 本社営業部 086-227-7161です。

AMDA ホームページ
<http://www.amda.or.jp>

AMDA プロジェクトへのご支援をお願いします

★アジア		
インド	保健衛生	*アユルベーダ薬草園プロジェクト
カンボジア	地域医療 人材育成 教育 緊急救援	*AMDA カンボジアクリニックプロジェクト/巡回診療プロジェクト *タケオ州アングローカル行政区保健衛生プロジェクト *デイケアセンター/チャンバック小学校再建プロジェクト *メコン川水害緊急救援プロジェクト
ネパール	医療 人材育成 保健衛生 子ども病院	*ダマック市 AMDA 病院プロジェクト *医療人材育成センタープロジェクト *エイズ予防プロジェクト *AMDA ネパール子ども病院プロジェクト
バングラデシュ	地域医療 人材育成	*無料診療所プロジェクト/ボートによる巡回診療プロジェクト *AMDA トレーニングセンタープロジェクト (ACT)
ミャンマー	子ども病院 地域医療 人材育成 教育 保健衛生	*ミャンマー子ども病院プロジェクト *AMDA 診療プロジェクト *医療専門家育成プロジェクト (ACT) *防災学校/教育普及プロジェクト *浄水供給プロジェクト
★アフリカ		
アンゴラ	地域医療	*国内避難民救援プロジェクト
ケニア	自立支援 保健衛生	*ABCプロジェクト *HIVプロジェクト
ザンビア	保健衛生 自立支援 自立支援	*PHCプロジェクト *ABCプロジェクト *コミュニティー農園プロジェクト
ジブチ	地域医療 地域医療 人材育成	*ソマリア難民救援医療プロジェクト *エリトリア難民救援医療プロジェクト *産婦人科病院人材育成プロジェクト
ルワンダ	自立支援	*ABCプロジェクト
★ヨーロッパ		
コソボ自治州	地域医療	*診療所再建・診療プロジェクト
★中南米		
ボリビア	人材育成	*上級救急救命技能研修プログラム
ホンジュラス	保健衛生 保健衛生	*HIVプロジェクト *衛生教育セミナープロジェクト/排水溝建設プロジェクト

「ミャンマーの子どもたちに栄養給食を」



ジャスコ ミャンマープロジェクト支援バザー

あなたたちのちからを
必要とする人たちがいます



AMDA募金箱を置いていただける方はご連絡下さい (TEL 086-284-7730)